

### 3. 岩手県立中央病院における ビューワの導入と運用

#### — PACSによる画像診断：タブレットへの 応用とコンピュータ支援診断について

佐々木康夫 岩手県立中央病院放射線診断科

画像診断は、フィルム中心からモニタ診断とフィルムの併用時期を経て、一気にモニタ診断へと移行した感が強い。PACSと電子カルテの普及により、医療情報の共有が進んだことは間違いないが、これらが医療の効率化や質の向上にどの程度寄与したかについては、今後の評価を待たなければならない。

モニタ上で画像参照が可能になった現在、PACSは単なる画像参照ツールから、医療の実態を変えるさまざまな技術革新を取得して発展できる可能性が出てきた。その一つに、タブレット端末によるビューワの多様化があり、画像は外来や病棟を離れてどこでも参照できる医療情報となった。また、デジタル化された画像データは、単に参照するためだけでなく、コンピュータの解析対象になることから、技術的な進歩さえあれば新たな判断基準を医療に

もたらす可能性を秘めている。

本稿では、現在取り組んでいるタブレット端末での画像参照システムの開発と、PACSに搭載可能な実用的なコンピュータ支援診断(CAD)の使用経験について述べる。

#### タブレット端末での 画像参照

電子カルテは、医療情報の入力や参照ツールとして有用性が高いが、現状の電子カルテは外来や病棟の机上で利用することを前提としているため、院内のあらゆる場所で情報が参照できるわけではない。そこで、電子カルテにある情報をiPadなどのタブレット端末で参照し、情報利用系の汎用性をできるだけ広げるためのシステムを開発した。方法としては、

電子カルテ情報はデータウェアハウスから、画像、検査などの情報は各部門から直接取得し、タイムライン上にマトリクス表示する統合ポータル画面を作成した。各医師(職員)は、患者ごとや科別、病棟などのワークリストから、画像も含めたすべての情報を簡単にiPadやiPod touchで参照することが可能である(図1)。タブレット運用と情報の統合化によって、PACSと電子カルテの境界は明確なものでなくなりつつある。

#### タブレット端末での 参照状況

当院では、iPod touchを全医師に配布し、運用を開始したが、使用状況は診療科や個人によって差が見られた。利用頻度が多くない理由としては、電子

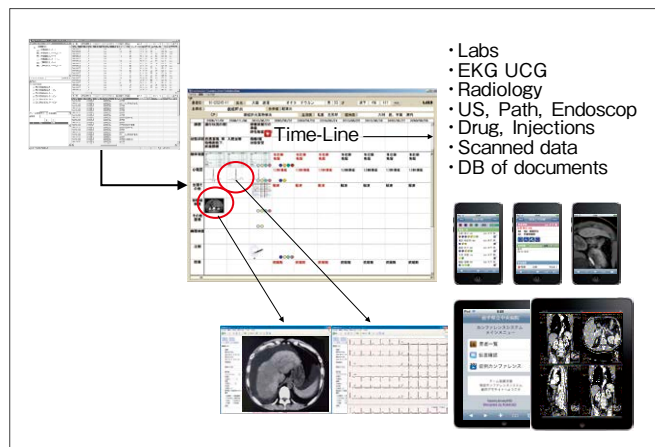


図1 統合ポータルとタブレット端末での参照

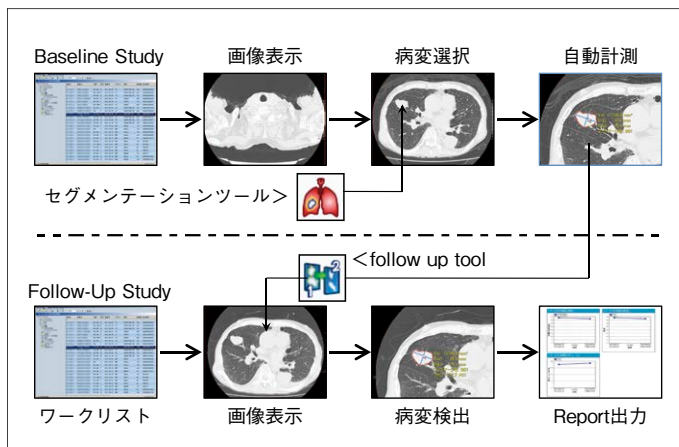


図2 Lesion Managementのワークフロー